BORDERLESS HERITAGE

文化遺産

おもてうら

「よそ者」が継承する文化遺産

――モロッコ・マラケシュのリアド

安田慎（やすだしん）　帝京大学講師

文化遺産の保全は、地域住民にのみ託されたものなのか。観光の現場では、固定化された前提を問い直す実践がおこなわれている。

中東における旧市街と生活空間の保全

中東各地では近年、旧市街にある文化遺産としての歴史的建造物を観光に活用することが流行している。その結果、お洒落なレストランやカフェ、ホテル、ゲストハウス、ギャラリー、ブティックが建ち並び、観光客のみならず地域の人びとの交流の場ともなっている。

ブームの背景には、中東の旧市街が抱える特有の事情が横たわる。世界遺産に登録されることも多い旧市街は、保全のためのさまざまな制約が課せられる結果、改装費用が高騰し、日常生活の場になじまなくなっていった。その結果、これらの建造物が放棄されることも多く、文化遺産の登録が、保全ではなく逆に破壊を招いてしまうというジレンマを抱えていた。

放棄された歴史的建造物

しかし、近年の観光振興による保全活動は、観光客や地域住民たちの憩いと交流の場を生み出し、旧市街にあらたな文化的活力を生み出してきた。モロッコ西部・マラケシュの旧市街（メディナ）も、そうした場所のひとつである。

モロッコ・マラケシュのリアドより

マラケシュの旧市街も御多分に漏れず、リアド（リヤード）とよばれる伝統的家屋を改装し、手頃な値段のホテルやゲストハウスとして活かす動きが見られ、観光客からの人気を博している。筆者も他の場所ではできないモロッコ的な体験を期待し、友人の研究者から聞き出し、ウェブ上のホテル予約サイトでいくつかを予約し、クレジットカードで前払いをして現地へと赴いた。

いざマラケシュへと足を運び、旧市街の雑踏を抜け、狭い通りの奥にある一軒のリアドに着くと、いかにもモロッコの「伝統的な」雰囲気を醸し出す部屋や中庭が広がっていた。特に、マラケシュやモロッコ各地で作られたと思われる伝統的な手工芸品や調度品、装飾で埋め尽くされた内装は、オーナーのセンスの良さを感じさせるものであった。さすがモロッコだと感心していると、一人の欧米人女性が筆者にあいさつし、自分がこのリアドのオーナーだと告げるのであった。その瞬間、筆者は思わず返答に窮するのだった。

翌日に次のリアドに移ると、レセプションの奥で優雅にモロッコ・ティーをすすっているのは欧米人のオーナーだとスタッフの一人が教えてくれる。中庭でお茶をいただいていると、近くに住んでいると思われる別の欧米人がやってきて、中庭で優雅にパソコンを広げながらオーナーとフランス語で会話を楽しんでいる。これはいったいどういうことなのか……。

右上：マラケシュ旧市街の様子　左上：リアドの外観
下：改装されたリアドの中庭

倒錯する「モロッコ性」

近年では欧米人のあいだでも旧市街のリアドを購入し、自分の好きな装飾や調度品で揃えてホテルやゲストハウスを開設することがブームになっている。その背後には、モロッコ政府による外資誘致や観光振興政策の動き、欧米諸国とモロッコとのあいだの給与水準や物価の格差といった政治的・経済的要因が見て取れる。しかしそれ以上に、欧米人によって表現される「モロッコ性」とは何であるのか、という点に研究者としてはどうしても目を向けたくなってしまうのだ。

これまでの中東観光研究のなかでは、乱暴な言い方をすれば、ゲストとしての先進国観光客と、ホストとしての新興国の地域住民の非対称性がもたらす社会的インパクトが研究対象となってきた。この議論では、文化遺産の保全と継承は地域住民によって担われるはずである、というある種の「思い込み」が前提となって議論が展開されてきたと言える。

しかし、これらのリアドの事例は、その固定化された前提そのものに疑問符をつける。ゲストであるはずの欧米人がホストとして、モロッコという地域の文化遺産を「洗練させ」、継承していく。むしろ、地域住民が生活空間の日常の諸実践のなかで織り成し、表現してきた「モロッコ性」よりも、欧米人オーナーの演出する「モロッコ性」にこそ、観光客のみならず地域住民たちもオーセンティシティを感じ、そして消費していくように見受けられる。

文化遺産を保全するとは何であるのか。モロッコでのフィールド調査の最中、こんな疑問が頭のなかをめぐり続けていたのだ。